

名古屋まつり協賛

日本古武道大会

日 時 平成 28 年 10 月 15 日 (土) 午前の部 10:30~12:00
午後の部 12:30~15:30

場 所 热田神宫神楽殿前広場 <午前の部>
热田神宫文化殿講堂 <午前の部・午後の部>

(駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。)

主催 日本古武道振興会

目 次

I 挨 捷 (作成中)

| | | |
|-----------|--------|--------|
| 名古屋まつり協進会 | 会長 | 河村たかし |
| 日本古武道振興会 | 会長 | 飯篠 快貞 |
| 日本古武道振興会 | 愛知県支部長 | 柳生耕一巖信 |

II プログラム (演武順)

午 前 の 部 <熱田神宮神楽殿前広場>

1. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式

<熱田神宮文化殿講堂>

1. 合 気 道
2. 柳生新陰流兵法
3. 神道夢想流杖術及併伝武術
4. 尾張貫流槍術・柳生新陰流兵法
5. 天道流なぎなた
6. 柳生制剛流抜刀

午 後 の 部 <熱田神宮文化殿講堂>

1. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型
2. 柳生制剛流抜刀
3. 鞍馬流剣術
4. 竹内流腰廻小具足
5. 琉球古武術
6. 柳生心眼流體術
7. 宝蔵院流高田派槍術
8. 神道無念流剣術
9. 関口流抜刀術
10. 尾張貫流槍術・柳生新陰流兵法
11. 心形刀流剣術
12. 神道夢想流杖術
13. 新陰流居合術
14. 神道夢想流杖道
15. 柳生新陰流兵法

III 流派紹介 (あいうえお順)

1. 合 気 道
2. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式
3. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型
4. 尾張貢流槍術・柳生新陰流兵法
5. 鞍 馬 流 剣 術
6. 新陰流居合術
7. 心形刀流剣術
8. 神道夢想流杖術
9. 神道夢想流杖道
10. 神道無念流剣術
11. 関口流抜刀術
12. 竹内流腰廻小具足
13. 立 身 流
14. 天道流なぎなた
15. 宝蔵院流高田派槍術
16. 柳生新陰流兵法
17. 柳生心眼流體術
18. 柳生制剛流抜刀
19. 琉 球 古 武 術

流派紹介

(あいうえお順で掲載： 流儀名は、日本古武道振興会流儀解説書に準拠)

1. 合氣道 (開祖) 植芝盛平

合氣道は、開祖植芝盛平翁（1883～1969）が日本伝統の武術の奥義を究め、さらに厳しい精神的修行を経て創始した現代武道である。合氣道は相手といたずらに力で争わない。入身と転換の体捌きから生れる技によって、お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の鍛成を図るのを目的としている。合氣道は他人と優劣を競うことをしないため、試合を行わない。お互いを尊重するという姿勢を貫く合氣道はいのちの大切さがうたわれる現代に相応しい武道といえるだろう。合氣道が「和」の武道といわれる所以もここにある。

2. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式 (流祖) 小笠原 長清

小笠原氏は、其祖新羅三郎義光に出る。義光の曾孫加賀見二郎遠光射術に長じ、高倉天皇承安年中に勅を奉じて紫宸殿の怪を払い王家の家紋を賜う。其子左京太夫長清始めて小笠原氏を称し、小倉、唐津両家の祖となる。長清三代伊豆守清経別に一家を創る。是当家の祖なり、爾来両家射術をもって鎌倉幕府に並仕す。後、子孫継承し、足利、徳川の將軍に仕え弓馬礼法の道を伝う。当家歩射伝承には鳴弦、墓目を始め百々手式、大的式、草鹿等多く、特に鳴弦、墓目は公開の席上で行うことはなかった。

3. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型 (流祖) 小笠原 長清

騎射とは騎乗して弓矢を射る事を意味し、騎射が時代と共に儀式化され、五穀豊穣の祈願、魔除の祈願などに催し、代表的なものに流鏑馬（やぶさめ）が行われた。流鏑馬は、記録によると平安時代のものが一番古いが、実際にはもっと溯って行われていたと思われる。全国の神社では、古くから競馬（くらべうま）、流鏑馬などの祭事が行われており、また古書にも、犬追物（いぬおいもの）、笠懸（かさがけ）、など武士が武技を練った馬術とは別に、宮廷や神前で行われた流鏑馬の文献もみられる。神事として、発達、洗練されて来た事も周知の通りである。的中により、年占をしたり中り目的を御守護として、頂く事も一般的になっている。

源頼朝が鶴岡八幡宮の祭礼に流鏑馬を奉納して、特に天下泰平・国家安泰の祈願を籠めたものには、古い歴史と、神事としての深い理由があったのである。

流鏑馬射手の服装は、古来「あげ装束」と云われ、儀礼化された鎌倉武士の狩装束として伝わる。頭に引立鳥帽子、綾襷笠（あやいがさ）を冠る。鎧直垂、射籠手（いごて）、夏鹿毛の

行縢（むかばき）を付け、太刀を佩き腰刀を差す。背に簾を負い、鏑矢に雁又（かりまた）の付いた矢を盛る。鞭をつけ、弓を握る。足は物射沓（ものいぐつ）をはく。

騎射挾物（きしやはさみもの）は、流鏑馬を簡素化された式で、徳川吉宗が創案された。射手の服装は、筒袖の着物に袴（免許の後、小袴）をつけ、射籠手を差し黒足袋をはく。

4. 尾張貫流槍術

（流祖）津田權之丞信之

（春風館道場）

柳生新陰流兵法

（流祖）柳生兵庫之助利巣

貫流槍術は尾張のみに伝えられた流儀である。貫流の祖は津田權之丞信之で、先祖は平家織田氏の一族である。役を退いた後一介（いっけい）と号した。尾張藩馬廻役千石津田太郎左エ門知信の次子として生まれ、幼き頃より槍術を好み伊東流管槍を虎尾三安の門人森勘兵衛に学んだ。勘兵衛の尾張退去後も更に佐分利円右衛門忠村を師とし、寛文10年5月15日16歳にしてその奥伝を学び取り、後も朝鍛夕練ある日豁然としてその大道を悟り、横手長矩心理一貫の極意を自得し、管に活気の妙あることを知り、新しく派を建て、貫流と称した。世にこれを津田流あるいは、津田貫流ともいい、元祖5年槍奉公となり三百石を賜った。藩主徳川吉通はことのほか熱心で、他藩に伝えることを禁じたことから御止流とも言われた。

これは別名試合勢法とも云い、柳生流補佐役長岡桃嶺子先哲の教えを受け、八勢法を始めとする八本のかたに始まり、表六十一勢法、前に三勢法、併せて六十四本、後の雷刀三十一本、外の雷刀三十一本、その他小太刀、二刀のかたなど剣に関するかた計百数十本、その他やり、なぎなた等に関するもの二十数本、試合がたの基準として伝えられたものである。

5. 鞍馬流剣術

（流祖）大野將監

京都の鞍馬山には、源義経が、鬼一法眼に就いて修行し、超人的な腕前に達した、との言い伝えがある。鬼一法眼は義経の他、鞍馬の八人の僧兵へ武術を伝えており、これが鞍馬八流、または京八流と呼ばれているが、確かなことはわかっていない。流祖の大野將監（天正年間の人）が何人について修業し、この刀法を編み出したかは戦災により秘伝書焼失のため不明である。鞍馬と名のつく流派は剣・槍・棒・抜刀などいくつかあったが、剣術では將監鞍馬流だけとなってしまった。

將監鞍馬流は、天正年間に大野將監によって創始され、林崎甚助、加藤玄蕃、幕末から明治にかけて、十四代金子助三郎、十五代宗家を継いだ柴田衛守が流派の中興の祖といわれている。柴田衛守は直參旗本出身で、東京四谷に習成館道場（勝海舟命名、一八七九年創設）を開いて門人を育てる。大日本武徳会剣道範士、警視庁剣道主席師範をつとめる。衛守の子勸（警視庁、貴衆両院剣道師範）と受け継がれたが、昭和二十年の戦災で習成館道場は焼失し、鞍馬流の秘伝書、古文書、武具など全て灰となってしまったのは誠に惜しい極みである。その後勸の

子十七代鐵雄により道場は再興され、現在は鐵雄の子章雄が十八代宗家として鞍馬流と、東京にある個人の剣道場では一番古い剣道場習成館を継承している。

鞍馬流の木刀の形は、蛤刃の太い木太刀を使って行い、気迫に富んだ発声をもって演武するのが特徴である。形は七本ありその名称は、正當剣、閃電、燕飛、青眼、変化、気相、水車である。五本目の変化は、「警視流木太刀の形」の二本目に採用されている捲き落とし技で、現代剣道においても大いに活用されている。鞍馬流居合は五本あり、その名称は一文字、胸之位、戻り打、上段、地摺である。

6. 新陰流居合術 (流祖) 柳生但馬守平宗巖 精勇館道場

永禄・慶長の頃、水早長左衛門信正という豪族が、制剛という僧から柔術の極意を受け、又居合にも通じていた。弟子の梶原源左衛門直景は師信正の極意を承継し、制剛流柔術と居合を以て尾張大納言義直公に仕えた。制剛流八世で新陰流師範補佐でもある、長岡惣三郎房成が制剛流居合を大成し、「柳生制剛流居合術相伝書」を残した。この相伝書が柳生家に伝わり、柳生巖長師により、新陰流の刀法の術理により、練り直され完成された。

柳生巖長師は昭和6年2月14日名古屋第3師団剣道競技大会で「新陰流居合」の流名で演武されている。この年に先代精勇館々長・鹿嶋清孝師は柳生巖長師に師事する。

昭和11年3月、鹿嶋清孝師は免許皆伝を許される。免許の見出しへは「柳生流兵法抜刀」となっており、「伝来」には「流祖、柳生但馬守平宗巖」、以下代々の柳生家の道統が記載されている。

昭和13年7月17日鹿嶋清孝師は「精勇館道場」を建設し、柳生巖長師を招き居合の教授をお願いした。その際柳生巖長師は「これが本当の新陰流の居合」と、言われた。鹿嶋清孝師はこれにより「新陰流居合術」と、称することになった。

戦後間もない昭和20年秋、名古屋駐留米軍指令部から「柳生流を見たい」と米軍将校が精勇館に来た。鹿嶋清孝師は柳生巖長師と栗本信三師と共に米軍指令部で「新陰流居合・新陰流兵法」を演武し、「神業である」との喝采を得た。その場で軍属2名が精勇館に入門し、指導したが、その際「剣道はもとより居合も個人で稽古することは差支えない」との確証を得た。これにより精勇館では、戦後の混乱期にも「新陰流居合術」の名称で稽古を続けた。

鹿嶋清孝師は戦前は大日本武徳会京都大会、戦後は全日本剣道連盟京都大会で演武し「新陰流居合」を全国に広めた功績は大きい。昭和37年には「名古屋まつり協賛日本古武道大会」を鹿嶋清孝師が主唱し、市会議員の宮田一雄氏、弓道家の富田剛一氏の協力を得て開催し、現在に至っている。

現在精勇館々長に鹿嶋清治氏が当り、門人相寄り、柳生巖長師、鹿嶋清孝師の居合を正しく承継している。

7. 心形刀流剣術 (開祖) 伊庭是水軒秀明

心形刀流は江戸時代初期、伊庭是水軒秀明が開祖した流派である。八代伊庭軍兵衛秀業は江戸下谷に道場を開き、当時北辰一刀流千葉周作、神道無念流斎藤弥九郎、鏡新明智流桃井春蔵らと共に、江戸四大道場と称せられた。九代伊庭軍兵衛秀俊が幕府講武所師範役に出仕したことで全国に広まり、心形刀流を採用した藩は多くあった。なお伊庭八郎の幕末動乱の際の豪男ぶりは大変有名であるが函館五稜郭の戦いにおいて27歳で戦死した。

亀山藩士山崎雪柳軒は八代秀業に師事した。免許皆伝の後、亀山に帰り元治2年道場を建て、亀山演武場と称して心形刀流を修業、また門下の指導にも当たった。廃藩後、同流儀が廃絶していく中、心形刀流は亀山でのみ今日まで伝承され昭和50年三重県無形文化財（第1号）に指定された。なお星霜に耐えた幕末の道場は昭和60年1月焼失したが、同63年に復元落成している。

心形刀流は心の修養を第一義とし、技の鍛磨を第二義とする。すなわち技は形であり、心によって使うものである。心正しければ技正しく、心の修養足らざれば技乱れる。この技が刀の上に具現され流名の心形刀流となる。

演武

心形刀流 居合裏の形

心形刀流 小太刀の形

8. 神道夢想流杖術 (流祖) 夢想権之助勝吉

木曾の住人夢想権之助は香取神道流剣術（流祖・飯篠山城守家直）を学び、奥義を極め、更に鹿島新当流（流祖・松本備前守）を学ぶ後、筑前の竈戸神社に参籠のとき、「丸木を以って水月を知れ」と云う神示を賜り夢想流をあみだしたと云われる。杖は直径八分（2.4cm）長さ四尺二寸一分（128cm）の丸木であるが、操作次第で突き、払い、打ちを主体に右に応じ左に変じ千変万化し、敵をして対応にいとまなからしむることが特徴である。突けば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにもはずれざりけり。その指導原理は同流伝書の「傷つけず人をこらして戒むる、教えは杖の外にやはある」とある如く、あくまで平和の中に偉大な武の徳を顕現するところにある。形は表業、中段、乱合、影、奥伝、秘伝等六十四が示される。

黒田藩の杖は武所として代々相続。杖術、一心流鎖鎌術、一角流十手術、一達流捕縄術、中和流鉄扇術等だが、通常前三流を公表している。

9. 神道夢想流杖道 (流祖) 夢想権之助勝吉

神道夢想流杖の開祖、夢想権之助勝吉は慶長年間（約400年前）の人と伝えられ香取神道流武術の祖、飯篠山城守家直の門に入り香取神道流の奥義を究めその免許を受け、さらに鹿島神流の極意「一の太刀」を授かったと伝えられる。

そのころ夢想権之助は多くの剣客と試合をし敗れたことはなかったが、時代を同じくする剣豪宮本武蔵との試合で十字留にかかり敗れた。

それ以来、夢想権之助は武蔵の十字留を敗らんと、筑前の国（福岡県筑紫郡）に至り、大宰府天満宮神域に連なる靈峯宝満山に登り玉依姫を祀る竈戸神社に祈願参籠、満願の夜、夢の中に童子が現れ「丸木をもって水月を知れ」とのご神託をもとに四尺二寸一分、直径八分の杖を用い、これに槍、薙刀、太刀の三つの武術を総合した神道夢想流杖を編み出し、再度、宮本武蔵に試合を挑み見事十字留を敗ったと伝えられている。

その後、神道夢想流杖は福岡黒田藩に用いられ十数人の師範家を起こし盛大に指南され、特に藩外不出のお留め武術として四百年来伝えられて来たものである。

近年において神道夢想流杖は実戦的かつ実用的な卓越した武術と高い評価をうけ、第二次世界大戦前においては著名な剣道家、柔道家、海洋少年団、満州国全土の青少年訓練に用いられ、戦後には警視庁機動隊、大阪府警機動隊においても警杖と呼称、採用され、現在では各種団体、企業、大学におけるクラブ活動など全国で普及活動が行われており、特に海外における杖道愛好者の増加は眼を見張るものがある。

神道夢想流杖の伝承とその普及を目的とした愛杖会は、愛知県において早くから神道夢想流杖の普及と武道を通じて青少年の育成等に貢献、活躍された故濱地光一師範（昭和60年没）の杖に対する心とその精神を引継ぎ活動している。

10. 神道無念流剣術 (流祖) 福井兵右衛門

流祖・福井兵右衛門嘉平は元禄十三年下野国に生まれ、はじめ一円流の師野中権内について修業し、技心大いに衆に抜きんでて諸国武者修業に励み、信州戸隠の飯綱権現に立ち寄って参籠、祈願すること五十日に及び、ついに剣の奥義を悟り、神道無念流を創始したといわれる。

その後、江戸四谷に道場を開き、門弟の育成と流派の発展に努力したが、神道無念流が広く世間に知られるようになったのは戸賀崎熊太郎暉芳からである。暉芳は延享元年武州清久村の生まれで、十五歳のときに江戸に出て嘉平に師事し、入門六年後、弱冠二十一歳で免許を得た。

のち、岡田十松や斎藤弥九郎などの剣客がこの門から出るに及んで一層隆盛を極め、とくに斎藤弥九郎は、北辰一刀流の千葉周作、鏡心明智流の桃井春蔵と並び幕末三剣豪といわれた。門下には江川太郎左衛門、藤田東湖、桂小五郎、品川弥二郎、秋山要助、仏生寺弥助ら錚々たる剣客や人物が輩出した。明治以降、根岸信五郎、中山博道によって受け継がれた。

11. 関口流抜刀術 (流祖) 関口八郎左衛門源實親

流祖は、江戸時代初期の人で紀州藩士である。関口流柔術の開祖である関口柔心の長男として生まれ、父より刀・槍・柔術などを習い、豪勇であった。承応三年紀州藩を辞して諸国修行の旅に出、後、江戸の芝浜松町に道場を開いた。延宝元年紀州藩に帰参し、頼宣公に仕え、五

百五拾石を給せられている。江戸の道場には、信州松代藩主眞田伊豆守はじめ、諸国の藩士が多数入門して、関口流は全国に伝播し、多くの系統に分かれた。

私どもの流儀は、流租の高弟で渋川流柔術を立てた二代渋川伴五郎義方に江戸で学んだ、熊本藩士井澤十郎左衛門長秀によって肥後に伝えられ、一名肥後流とも称するものである。長秀は、山崎闇斎の門人で、神道、国典に精しく、また漢学に通じ、「武士訓」等著書多く、文武両道の人であった。帰国後、長秀は秀れた抜刀術を認められて居合師役に任せられ、以来道統は連綿と今日に及んでいる。

当方には、二天一流第八代宗家で十四代青木規矩男の台湾時代に学んだ十五代亀谷鎮により伝えられ、貫流槍術第八代宗家でもある十六代高木和雄を経て、宮崎勇夫へと継承されている。

身長より三尺引いたやや長い刀を用いるため、鋭く引鞘をして抜刀し、大声に気合をかけながら飛違って、全体重を刀にかけて斬る激しい刀法が特色である。

業は坐業の居合十一本、小太刀五本、立業の歩合五本、袖抜三本、その他に懐剣三本、太刀抜三本、介錯の太刀、大太刀抜を伝えている。

12. 竹内流腰廻小具足 (流祖) 竹内中務大輔源朝臣久盛

流祖竹内中務大輔源朝臣久盛は、清和源氏経基王より十五代の後裔従三位竹内大膳大夫豊治の長子播磨守幸治の子で、美作国井和郷一の瀬城主である。

幼児より勇壮で剣を好み長ずるに従い、その道に通ずるといえども未だ足らざると悟り、愛宕神を信じ作州井和郷三の宮に参籠し、日に三度斎浴して武神に祈願し、二尺四寸の木刀を以って大樹を打ち技を練ること六日六夜、忽然と武神現われ兵法の一術を示そうと彼の木刀をとり長きに益なしと之を二つに切って、小太刀とし、小具足と命名し、その奥義を授かり、又かずらをとって武者擣を授かり之を迅縛と称えた。

以来竹内流捕手腰廻り小具足組討と号して、その業が妙域に達した。時に天文元年6月24日の事であり、竹内流が始めて世に行われるようになった。

当流は柔術の草分けである。

二代目常陸介久勝、三代目加賀介久吉共に近衛、鷹司関白よりそれぞれ日下捕手開山の御綸旨を賜わり、全国武者修業に於ける真剣勝負を流儀に補い親子孫三代に渡っての洗練された流儀である。竹内藤一郎源久宗氏は、宗家十四代目師範であり、現在岡山県御津郡建部町角石谷に、当時の道場が現存し指導に当たっている。

13. 立身流 (流祖) 立身三京

流祖立身三京は足利時代、伊豫の国の武将で、幼少より武術に精進し、幾多の勝負に勝ち抜いたが、技法を超えた高度の心法を極めんとして、妻山大明神に祈願して大悟し、勝機を未撃

に知る無我の心境に達し、必勝の原理を体得し、立身流を創始した。江戸時代は下総佐倉の堀田藩で、武士教育の中核として重視され、権威ある宗家統率のもとに、非凡な剣士に厳しく伝承され、伝書十五巻や古文書と共に、正確に現在まで伝えられた。幕末頃には半澤成恒・逸見宗助・兼松直簾らの名人が出た。

警視流の形には、立身流から剣術に「巻落」、居合に「四方」、柔術には「柄搦み」各一本宛採用された。豊前中津の奥平藩に立身流の分派立身新流があって、福澤諭吉はこれを学び、晩年まで自負したのは有名である。

14. 天道流なぎなた (流祖) 斎藤半官伝鬼房勝秀

天道流は今から約450年前、常陸の国（現在の茨城県）に生まれた斎藤半官伝鬼房勝秀によって創始されたものであります。

伝鬼房は、塚原ト伝の門に入り、刀槍の術を学び自己の技の未熟を感じ、天正9年、鶴ヶ丘八幡宮に百日の参籠をし、誠の道に叶う剣の技を得て一流を興して天流と称し、後に天道流と改められ多くの門弟に誠の心と技を伝えました。

諸国修業をおえて郷里に帰り霞神道流の櫻井大隅守との決闘の際に示した矢切の術を一字の乱れといい流儀の基本になっております。

現在、薙刀・二刀・杖・剣・鎖鎌・小太刀等の技が伝承されています。流儀の特徴は形試合であって、形そのものが即ち真剣試合であります。

現在第17代宗家 木村恭子先生が継承しております。

15. 宝蔵院流高田派槍術 (流祖) 宝蔵院覚禪房法印胤栄

流祖宝蔵院覚禪房法印胤栄（～1607）は南都興福寺の僧。武芸を好み、柳生但馬守宗厳と共に上泉伊勢守から刀術を学んだが、一方、諸国修行中の槍法の達人、大膳太夫盛忠を坊中に留め槍の修練に努め、ついに猿沢池に浮かぶ三日月を突き鎌（十文字）槍を工夫し、宝蔵院流槍術を創めるに至ったと伝えられている。

そして後日、高弟中村尚政にその正統を伝え、さらに尚政からその妙術を承継したのが高田又兵衛吉次である。高田又兵衛は後に小倉藩に移り、以後子孫代々これを相続した。そして、その高弟森平政綱ら三名が江戸に出てその槍法を広めたので大きく世に顯れ、やがて全国を風靡しその弟子四千人と伝えられ、日本最大の槍術流派へと発展した。また幕末の幕府講武所には多くの宝蔵院流の師範がいた。明治大正期の大家山里忠徳先生が、大正7年暮、第一高等学校撃劍部にその槍合せの型を伝え、矢野一郎、横田正俊先生や元最高裁判所長官・石田和外先生がこれを伝習して、昭和51年に石田先生より表・裏・新仕掛35本を西川源内先生に伝授され発祥の地、奈良に里帰りし、さらに平成3年に鍵田忠兵衛先生が第二十世を、平成24年1月に一箭順三師範が第二十一世を継承し今日に至っている。

宝蔵院流の槍は、通常の素槍に対し鎌槍と称する十文字型の穂先に特徴がある。この鎌を活用して、突くだけでなく、巻き落とす、切り落とす、打ち落とす、摺り込む、叩き落とす等の攻防に優れ、当時としては画期的な武器で「突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌 ともにかくにも外れあらまし」との歌が伝えられているほどである。また、甲冑をつけた時の体勢として重心を低く構え、突くところは、前面、裏面、前胴、腿などである。

16. 柳生新陰流兵法 (流祖) 上泉伊勢守 藤原信綱

戦国末期、上州の住人、上泉伊勢守藤原信綱は刀・槍の術にすぐれ、若くして諸流に達し、特に愛洲日向守移香斎の陰流の奥旨を究め、その中から「転」(まろばし)を工夫発明して、新陰流を創始した。その後永禄8年、信綱は「無刀の位」を開悟した大和の住人、柳生石舟斎宗巖に印可相伝をなし、これを正統第二世とした。宗巖の五男宗矩は徳川家康に仕え、将軍秀忠、家光の兵法師範となり、大名に列して当流の剣名を天下に広めた。次いで十兵衛三巖、宗冬、宗在、俊方、俊平・・・と伝えたが惜しくも兵法に遠ざかってしまった。一方宗巖は、嫡孫兵庫助利巖の偉才を愛し、膝下に置いて朝鍛夕鍊、流祖以来の流儀の玄妙の悉くを伝えた。

慶長10年、宗巖は利巖に印可相伝して、これを正統第三世とした。元和元年に利巖は尾張藩主初代徳川義直の知遇を得て、その兵法師範となり名古屋に移住した。利巖及びその子連也巖包は、太平の時勢を迎えたことを明察し、信綱・宗巖以来の教えと刀法を全面的に検討して大改革を断行し、より一層時勢に適応した自由な「直立(つった)つる身の位」を主体とした兵法を確立して当流を大成した。元和6年、利巖は義直公が一流の妙諦を了したるを喜び、道統を伝えて第四世とした。

義直公はその後、利巖の子、連也巖包に正統を譲り、巖包は尾張藩主第二代徳川光友に相伝した。このようにして、当流の道統は尾張柳生家代々の師範と尾張藩主徳川氏のうち兵法に堪能なる方々により伝えられた。

第十九世柳生巖周は尾張侯最後の兵法師範であったが、大正2年、明治天皇の当流保存の御聖旨により、宮内省済寧館に出仕した。第二十世柳生巖長は、近衛供奉将校団師範に任せられた。戦後、昭和30年、柳生会を設立し流祖以来の道業を興した。昭和42年からは、第二十一世柳生延春巖道師範がこれを受け継ぎ、東京・名古屋・大阪を中心に、当流の純正なる弘流と護持に身を挺すると共に日本古武道協会常任理事として、真の古武道の発展に尽力してきたが、平成19年5月に享年88歳で逝去した。その後、第二十二世柳生耕一巖信師範が道統を受け継ぎ今日に至る。

17. 柳生心眼流體術 (流祖) 荒木又右衛門吉村

当流は、柔術、剣術、棒術、居合術等を含む総合武道である。流祖は荒木又右衛門吉村で荒木堂と号し、法祖には柳生十兵衛をいただき、流名の心眼とは、禪家の喝の声を出さず目に現

す事としている。当流の修行方法は柔術を中心とし、身体動作、立位進退、腰の据え方、手足の調和などの基本を体得した後、各種武器の修練に入るのを原則としている。

心眼流は元来仙台の発祥で、仙台にもその伝系が継承されているが、二世小山左門は享保3年（1718）仙台に生まれ心眼流を修行、諸国を回遊修行後、江戸浅草にて道場を開き18年にわたって門弟を指南したといわれている。

小山は晩年、郷里に還住したが、その流れは当流江戸系として今日、十世武藤正雄から十一世梶塙靖司宗家に伝承されている。七世大島正照は、新徴組に参加し、勝海舟・山岡徹舟等と交わり、八世星野天知は明治文壇において、文芸雑誌「文学界」の同人として島崎藤村・北村透谷・樋口一葉等と交わり、明治文化に新風を送り込んだ。また、天知は、明治女学校にて、島崎藤村と共に教壇に立ちつつ女子教養の一助として武芸科を創立し、心眼流を教授している。島崎藤村が恋心を抱いた女性、左藤輔子の名も、その門人帳に見え、明治27年に目録を受けている。合気道の植芝盛平開祖や柔道の産みの親嘉納治五郎氏も青年の折、当流を学ばれている。

18. 柳生制剛流抜刀 (流祖) 水早長左衛門信正

制剛流の流祖水早長左衛門信正から極意を伝えられた梶原源左衛門直景は、その後尾張藩主義直に仕え、制剛流柔術を尾張藩に伝えた。勢州出身の長岡房英師は制剛流抜刀術の奥義を究め、また尾張柳生家の高弟で、兵法補佐に任じた。次代、長岡房成師は、特に新陰流の達人で、古来相伝の制剛流抜刀を大成した。これが柳生家に伝えられ、柳生巖周師及び柳生巖長師により、新陰流の術理に則り全面的に練り直され、柳生制剛流として完成された。現在の柳生耕一巖信師範にそのまま正しく伝承されている。

19. 琉球古武術

琉球武術は、徒手空拳術と武器術の二つから構成される。一般に前者を空手と呼び、後者を琉球古武術と称している。琉球古武術は八種の武器（棒、サイ、トンファー、ヌンチャク、鎌、鉄甲、ティンベー、スルジン）を使用し、武器毎にそれぞれの特色技を含み、琉球武術の要素と技法を奥深く秘蔵している。現在残されている型の大部分は二百年から数百年程以前の父祖達人の足跡である。

琉球古武術が歴史に現れ始めたのは、今から七百年程以前。日本で言えば、鎌倉、南北朝の時代。琉球の按司（あじ）の時代そして南山、中山、北山の三山が割拠し、また統合された百余年の間の戦に使用されたものであり、またそれら武器の使用法であったといわれている。時代を経て17、18、19世紀には添石（そえいし）、佐久川（さくがわ）、北谷屋良（ちやたんやら）等の大家が輩出し、隆盛を極めた。しかし、時代の変遷とともに継承者も徐々に減り、衰微の一途をたどり、ごくわずかな人々によってのみ点々と保存してきたのである。

こうした状況を憂慮した大正初期の先人達は、空手とともに琉球武術の双璧をなすこの琉球古武術の保存と振興に努力を傾注した。特に、屋比久孟伝師の門下、平信賢師は、昭和15年に保存振興会を創設し、長い年月を経過して伝來した各型を生涯を通じて集大成された。

当「琉球古武術保存振興会」は集大成された八種の武器からなる四十二の伝承型ならびにその全型の皆伝を受けた井上元勝が故師の遺命により編制した八種の武器の各使い方、基本組手、分解組手等一連の技術体系とともに正しく保存振興している。特に四十二の伝承型のうち、二十二が棒の型である。それだけ良く研究された含蓄ある棒法であり、琉球古武術の白眉の存在である。型名を「・・・の棍（こん）」という。現在、井上貴勝が宗家・会長としてこれを継承し、東京都に総本部を置く。